

## 『我らが相互の友』論（２）：ボッフイン（夫妻）の夢、 又は友愛のポリティックス

榎 本 洋

### V：三通の遺書

前章まで論じたことを簡単にまとめてみると次のようになるだろう。ディケンズが用いたハーモンの帰還という形式は既に何度も試みられたものでありながら、それが *OT* と異なるのは、財産を継承する筈のハーモンの内にある「意識の問題」であった。それはテキストの半ば程で（２部13章）示されるが、これが契機となって読者の関心がハーモンの殺人事件の解決から、ハーモン（又はロクスミス）の財産継承へと向けられ、発展していく。そのために様々な伏線、ヴィーナス（Venus）とウエッグの陰謀、ラムル夫妻（Mr. & Mrs. Lammle）のロクスミスの追い落としの画策、ボッフインの野望などが張り巡らされる事も指摘した。しかしそれにも拘らず、或いはそれが故に、場面の多様な展開と込み入ったプロットでテキストの構成は判りにくい。かってジャック・リンゼイ（Jack Lindsay）が『マーティン・チャズルウィット』（*Martin Chuzzlewit*, 以下 *MC* と略）を “a novel-or rather, three different novels” と名指しして、散漫な構成に不満をおちまけたのを枕にしてバーナードが *OMF* に手をつけたのも尤もなことに思われる（Barnard, 120）。しかし、構成上の不備も、何がハーモンの帰還を可能にしたかを考えれば必ずしも困難なものではない。つまり、それが老ハーモンが残した遺書である。すべてはこれらが発端だからである。

遺書は全部で三通存在する。ここではまず、その内容、日付等に注意しながら検討を加えておく。最初の遺書は、財産の一部は除き、息子に全ての遺産を贈るという内容で、但し書きの条件としてベラとの結婚が課せられていた。ハーモンも当然、これに従ってケープ・タウンから戻ってくる。モーテ

イマーがボズナップに説明するところによればこうなる。

‘His will is found , . . . It is dated very soon after the son's flight. It leaves the lowest of the range of dust-mountains, with some sort of a dwelling-house at its foot, to an old servant who is sole executor, and all the rest of the property - which is very considerable - to the son . . . . -Except that the son's inheritance is made conditional on his marrying a girl, who at the date of the will, was a child of four or five years old, and who is now a marriageable young woman. Advertisement and inquiry discovered the son in the man from Somewhere, and at the present moment, he is on his way home from there - no doubt, in a state of great astonishment - to succeed to a very large fortune, and to take a wife.’ (15-6)

この遺書の日付は ‘the son's flight’ の後になっているので、三通のなかではこれが一番、古いと思われる。従って、これを①としておく。更に ‘the lowest of the range of dust-mountains’ を長年仕えた召使のポッフインに残すと記した後で、付帯条件付きで息子への遺産相続を認めるという内容である。ただ、付帯条件が満たされなかった場合、召使のポッフインが財産を譲り受けることになっている。ハーモンが帰国途上で事故に巻き込まれ亡くなったために、後にポッフインは正式な相続人と認められる (89)。

以上が遺書①の内容とポッフインの財産相続のおおまかな経緯だが、テキストには別の遺書も存在する。物語に沿って取り上げてみよう。3部の6章では例によってウエッグ邸での読書会である。しかし、読まれるのはギボン (Edward Gibbon) の『ローマ帝国衰亡史』 (*The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*) ではない。ベラと外出したときに購入した *Merryweather's Lives and Anecdotes of Misers* (481) といった守銭奴の伝記、逸話集の類である。朗読後、ポッフインはウエッグ、ヴィーナスにその場に留まるように命じてから “his own Mound” (488) へ出掛ける。彼らが

こっそりと見守っているとも知らず、ボッフインは三番目のゴミの山から“an ordinary case-bottle; one of those squat, high-shouldered, short-necked glass bottles which the Dutchman is said to keep his Courage in” (488) を掘り出す。“Perhaps it's holler and full of something” (488) とウエッグがヴィーナスに耳打ちしたように、この“the bottle” (489) には大切な書類が含まれていた。これを遺書②としておく。ただし、この時点では書類の内実、つまり遺産相続の条件は明かされていない。これは読者は勿論のこと、ウエッグ、ヴィーナスに対しても同様である。つまり、後に明らかになるが、あらゆる情報に周知しているのはボッフイン夫妻である。

そして、我々読者はこれについて詳細が知らされぬまま、次の遺書に出くわす。3部7章でヴィーナス相手にウエッグが見付けたといっている“a cash-box” (492) がそれにあたる。外側には“MY WILL, JOHN HARMON, TEMPORARILY DEPOSITED HERE” と“a parchment label” (493) が貼りつけてある代物である。「書類を調べたんだ」というウエッグは、遺書の具体的な内容をこう説明する。

*'... Regularly executed, regularly witnessed, very short. Inasmuch as he was never made friends, and has ever had a rebellious family, he, John Harmon, gives to Nicodemus Boffin the Little Mound, which is quite enough for him, and gives the whole rest and residue of his property to the Crown.'*

*'The date of the will that has been proved must be looked to,' remarked Venus. 'It may be later than this one.'* (493)

この遺書は全ての財産を“the Crown”、つまり国王陛下に寄贈するというもので、ウエッグがボッフインに反旗を翻す有力な手掛かりとなるものである。これを遺書③としておく。続けて日付に関しては、“I said so. I paid a shilling . . . to look up that will. Brother, that will is dated months before

this will . . .” (493-4) と述べている。この “that will” が遺書①であり、ポッフインがゴミの山から見付けたものではない。大切なことは、ウエッグが現に保有している遺書③のほうが、①より数ヵ月後の作成であるという事実、つまりそちらのほうが法的に保証されているという事である。そうになると、ポッフインの相続は根拠のないものになってしまう。ウエッグが後になってポッフインを脅すのも、彼が所有するハーモンの遺書こそ法的な根拠があると思っているからである。ここで、ひとまず三通の遺書についてまとめてみよう。

遺書①：条件付きで息子ハーモンへの相続は認めたものの、条件が満たされない場合はポッフインが遺産を相続。日付は一番、古い。

遺書②：ポッフインがゴミの山から取り出したもの。内容、日付等は今の段階では不詳。

遺書③：ウエッグの保有するもので、一部のゴミの山を除き、すべて国へ寄付するという内容。日付は一番、新しい。

ところで、ウエッグが新たな遺書を手に入れたとしても、ポッフインに対して必ずしも優位を占めているわけではない。遺書によって共有する情報に各人の間にバラツキがあるからである。というのも、ハーモンはかなり後になるまで（4部14章）、最後の二つの遺書については知らされておらず、ベラに至ってはそもそも考慮の埒外に置かれている。問題のウエッグ、ヴィーナスは①と③の遺書については熟知していても、②についてはポッフインがゴミの山から掘り出した “an ordinary case-bottle” の中にある “something” との認識しかなく、詳細は知る由もない。つまり、この三通の遺書の内容については、関係者が全て同程度の情報を共有しているのではなく、ポッフイン夫妻のみが著者同様に同じ情報を共有しているため、他の人物にくらべ優位にあるといえよう。実際のところ4部13章でウエッグの陰謀が露見するまで、テキストのプロットは遺書を中心に展開し、この場面へと収斂していく。特に①の遺書を発端としてベラを試すハーモンと事件の真相、それに関連して父親ギャファアの無実を晴らそうとするリジーの願い。更に彼女に絡むへ

ッドストーンとレイバーン。この三角関係はユージン・レイバーンの襲撃とレイバーンとリジーの結婚、ライダーフッドのヘッドストーンの脅迫と二人の死といった具合に、波状的に幾人もの人物を巻き込んでいく。②、③の遺書はポッフイン夫妻と老ハーモンとの関係など、テキストでは直接、示されていない関係を教えてくれる。つまり、これらの遺書の問題は、テキストに及ぼす影響とその比重を考えると、絶えず念頭に置くべき重要な問題と思われる。

ところで、②と③の遺書の法的な実効性が明らかになるのが、ウエッグがヴィーナスを引き連れてポッフイン邸に意気揚揚と乗り込む箇所である。ところが彼らを待ち受けていたのは、ポッフインのみならず、スロッピー(Sloppy)とハーモンである。但し、ヴィーナスが“Mr. John Harmon”と言って挨拶するまで(786)、ウエッグにはロークスマスがハーモンであることは、当然の事ながら知らされていない。しかも、スロッピーがウエッグをあれ程、悩ました“foreman-representative of the dust contractors, purchasers of the Mounds”(779)と判り、背後で大きな意図が働いていることを察する。しかし、所有している③番目の遺書の有効性を信じて疑わないウエッグが“this present paper”(787)の中身について“then, I put the question to you, what's this paper worth?”(787)と問い糾す。“Nothing.”と答えたハーモンは“that Dutch bottle”を取り出し、ここに入っている“the latest will of the many wills made by my unhappy self-tormenting father”(787)、つまり②番目の遺書が最も日付が新しく、なおかつ有効と答える。続けてハーモンは遺書の内容について“**That will gives everything absolutely to my noble benefactor and yours, Mr. Boffin, excluding and reviling me, and my sister (then already dead of a broken heart,) by name**”(787)と無条件にポッフイン夫妻に遺贈される旨だった事を告げる。従って、この時点でポッフインを強請ろうとしたウエッグの追い落としは失敗に終わり、逆に成敗され、路上に放り出されてしまう。つまり、遺書③の有効性はここで否定される。この箇所はMCで、老マーティン(Old Martin)が一族の前でベックス

ニッフ (Pecksniff) を成敗しマーティン (Martin) の財産相続を認める場面 (ch. 52) を思い出さず。注意すべき事は、OMFでは前の章 (4部13章) でベラにロークスミスの身元が明かされと同時に、ポッフインとハーモンが仕組んだ “a pious fraud” (771) 又は “the little scheme” (775) も明らかにされるため、それだけ手の込んだ展開になっている。ところでこの計画には未だ先がある。ハーモンは更に続けて言う。②の遺書は、かつての主人の思い出を汚すという理由で夫妻を大変、悲しませたこと。困惑したポッフインは遺書を瓶に詰めてゴミの山に秘匿したこと。しかし、破棄するのを戸惑ったポッフインはハーモンに相談し、その法的な正当性を二人の立ち会いの許に行なった事も述べる。ここで、遺書②の内容と正当性が示されたわけである。ところが、遺産を相続したのはポッフインではなく、ハーモンである。その経緯については次のように説明される。

‘I am going to finish. You supposed me just now to be the possessor of my father's property. – So am I. But through any act of my father's or by any right I have? No. Through the munificence of Mr. Boffin. The conditions that he made with me, before parting with the secret of the Dutch bottle, were, that I should take the fortune, and that he should take his Mound and no more. I owe everything I possess solely to the disinterestedness, uprightness, tenderness, goodness (there are no words to satisfy me) of Mr. and Mrs. Boffin.’ (788)

このポッフイン夫妻の “the munificence” によりハーモンが相続権を得たという事は、つまるところ夫妻の権利放棄を意味し、彼等の善意によって遺書②の実効性が破棄されたということである。となると、最終的には遺書①の通りに全てが実現されたという事になる。テキストで “my allotted wife” (367) と結婚して、財産を相続すると指定されていた通りに実現したわけだが、注意すべき事はベラとハーモンの結婚が、財産の譲渡以前に、つまり彼

等が無一文の時になされた事である。世俗的な価値（財産）よりも愛情（結婚）に重きを置くという、ポッフインの意図を実現したものと思われる。これは、ベラが“a mercenary wife”（366）であった限り必要な措置と思われるが、それについてはポッフイン夫妻の大いなる「野望」とベラの「矯正」について論ずれば明らかになるだろう。

#### Ⅳ：ポッフイン夫妻の「計画」

こう見るとポッフインの行為は老ハーモンの遺志を忠実に再現したかに見える。しかしながら、老ハーモンが遺書で息子のジョンに課した細々した条件に顕著な人間不信、とげとげしさは、ポッフイン（夫妻）の行為には微塵も感じられない。ハーモンがウエッグに言ったように、彼の遺産相続はこの夫妻の“the disinterestedness, uprightness, tenderness, goodness”（788）に専ら負っているからである。ポッフインの考えていること、意図を思うとき、このような超俗的な善意は際立っている。これは一体、何を意味するのだろうか。

ここで、遺産を相続したポッフインが最初に着手したことが、「家族」を構築することに注意しよう。子供のない彼等にはある意味では当然かもしれないが、そもそもの発端として老ハーモンが子供たちに対してどのように振舞っていたかを、身近に見てきたこと。そのような仕打ちを受けた子供たちに対する同情があるように思われる。老ハーモンの苛酷な仕打ちに対してポッフイン夫人が「身を以て反対した」（“have stood out against”）したのも幾度にもなるという（89）。打ちひしがれた若いハーモンの思い出は、ロークスマスに扮したハーモンその人にも“*He was very timid of his father. I've seen him sit on these stairs, in his shy way, poor child, many a time. Me and Mrs. Boffin have comforted him . . .*”（184）と語られる。子供を引き取ろうという計画をポッフイン夫人が打ち明けるとき、ハーモンの思い出は必ず背後にちらつく。

‘... You remember dear little John Harmon, before he went to school? Over yonder across the yard, at our fire? Now that he is past all benefit of the money, and it's come to us, I should like to find some orphan child, and take the boy and adopt him and give him John's name, and provide for him. Somehow, it would make me easier, I fancy. Say it's only a whim -’ (100-1)

ところで、こうした二人の善意が“a religious sense of duty and desire to do right” (101) に基づくかぎり、ヴィクトリア朝特有のはた迷惑な慈善行為の例に漏れず、批判は免れない。語り手もポッフイン夫妻を“*These two ignorant and unpolished people*” (101) と述べ、彼らの愚かさを批判している。とはいえ、ベッティ・ヒグデン (Betty Higden) の死に際に、語り手が発した非難めいた調子とは根本的に異なっている (503)。やがて、ミルヴィー師 (Rev. Milvey) の斡旋でジョニー (Johnny) 引き取ることになるが、そのジョニーも早死にする (330)。ところで、この出来事は2部9章でロークスマスの正体がハーモンと知らされる直前のことであり、既に指摘したように、これを契機としてハーモンの相続という方向へ物語が転換するのと揆を一にするかのように、ポッフイン夫妻の家族計画も新たな段階を迎える。ちなみに、ポッフイン夫人がロークスマスの正体を見破ったのも、彼がペラに求婚してすげなく断られたその日の夜となっており (770)、方向転換はここからも示唆される。それを決定的にしたのがジョニーの死だろう。これが契機となりポッフイン夫人が“*But this little death has made me ask myself the question, seriously, whether I wasn't too bent upon pleasing myself.*” (334) と考え直し、スロッピーの面倒を見ると言い出したからである。ついでながら付け加えておくと、ロークスマスもポッフイン夫人には“*toward a mother*” (331) と母親に接するような態度で応対し、また彼女の母性愛も強調される (325)。

そもそも夫婦がペラを引き取ったのも許婚を亡くした彼女を慰めるためという名目だった (107-8)。ペラは結局、ポッフイン夫妻の新居引っ越しと同



時に、そこへ移り住むことになる(307)。ちなみに、ロークスミスを秘書として雇おうと決めるのは、ベラに会うためにウिल्ファー(The Wilfers)家を訪問する直前である(1部8章)。こう見るとポッフイン夫妻の家族構築の計画は、4部13章でベラに全て明かされるまで、既に早くから周到に用意されていたものと思われる。事はポッフイン夫妻が考えた通りに運ぶ。その点をアニー・サドリン(Anny Sadrin)は“*He boldly takes over from the story teller and, although illiterate, reveals unsuspected literary talents. He invents, plots, improvises and puts off disclosing the secrets for as long as he wishes.*”(Sadrin, 143)と指摘しているが、その通りだろう。しかし、修正の余地がないわけではない。まず、サドリンはポッフインのみについて指摘しているが、“the story teller”として役割を果たすにはポッフイン夫人の存在も不可欠である。ポッフインの「墮落の芝居」が際立つだけに、夫人の役割が多少、それに埋没した印象があるが、少なくとも家族構築の計画の発案は夫人に負っていることは再認識すべきだろう。更に注意すべきは、結果から見れば遺書①、つまり老ハーモンの遺志通りに全てが進んだかに見えるが、これは必ずしも老ハーモンの遺志の忠実な再現ではないという事である。老ハーモンの遺書は、息子の財産相続の条件として、自分が決めた女性(ベラ)との結婚を前提にしている。それならこう仮定したらどうなるだろうか。つまり、もしハーモンが殺人事件にも巻き込まれもせず、無事ベラの前に姿を現し、そのまま遺志通り結婚していたらどうなったであろうか。金のために結婚すると公言して憚らぬベラ(321)と息子を結婚させようとしたのが老ハーモンの思惑である。まだ年端もいかないベラを見て“*That's a nice girl; that's a very nice girl; promising girl!*”(42)といった呟いた老ハーモンなら、金目当ての結婚しか考えていないベラがそのまま結婚したら、夫婦にどんな悲惨な生活が待ち受けているかおおよその見当がついたと思われる。老ハーモンが「見込みがある」と言ったのもそのためだろう。更に、結婚してなお金に目がないベラが、財産の全てをポッフイン夫妻に譲るなどという遺書②の存在を知ったらどうなるだろうか。ダブネイ(Ross. H. Dabney)は

“He presumably expects these wills to take the inheritance away from his son after his son has married for it, and to involve all parties in the endless litigation of another Jarndyce and Jarndyce” (Dabney, 151) と指摘しているが、まさに指摘どおりの事態が予測されないだろうか。そうなると予想される悲劇的な事態を避けるために、ポッフイン夫妻が行なわなければならぬことがあった。

## Ⅶ：ポッフインは「墮ちる」

シュバルツバッハはポッフインの「墮落」の意味を “another aspect of the misuse of wealth” と述べているが、金が所有者に及ぼす影響云々を考慮すれば、凡そこれが標準的な見解だろう (F. S. Schwarzbach, 204)。しかし、シュバルツバッハの考えは、なぜ墮落したのか、或いはせねばならなかったのかという「動機」を見落とした凡庸な見解でもある。寧ろポッフイン(夫妻)はペラを矯正し、教育し、自らの家族構築の夢(つまり、ペラとハーモンの結婚・家庭の実現)をなすために、「墮落」しなければならなかったと思われる。例えば、ポッフインが守銭奴の伝記類を買い漁る光景は次のように描かれている。

‘Look in here, my dear,’ Mr. Boffin would say, checking Bella’s arm at a bookseller’s window; ‘you can read at sight, and your eyes are as sharp as they’re bright. Now, look well about you, my dear, and tell me if you see any book about a Miser.’

If Bella saw such a book, Mr. Boffin would instantly dart in and buy it. And still, if they had not found it, they would seek out another bookshop, and Mr. Boffin would say, ‘Now, look well all round, my dear, for a Life of a Miser, or any book of that sort; any Lives of odd characters who may have been Misers.’ (466-7)

これは大抵、ベラを連れ立って“his morning strolls about the streets”（466）で行なわれる。この有様は、“Bibliomania of the Golden Dustman”という題でマーカス・ストーン（Marcus Stone）による挿絵で更に鮮明に印象づけられる（図①）。この頃（3部5章）からポッフインの「墮落」が目立ってくる（ちなみにポッフインが、ゴミの山からボトルを見つけるのは次の6章である）。これが頂点に達するのがラムル夫妻の密告により（586），“a chap that I picked up in the street”（591）とハーモンを罵り、ついには彼を解雇してしまう箇所である（596）。一見するとこれは、ハーモンにその矛先が向けられたように見える。しかし、これを見たベラが“And now I can't bear the sight of you. At least, I don't know that I ought to go so far as that – only you're a – you're a Monster!”（597）とポッフインに対して憤りを顕わにしてそこを飛び出し、ハーモンと結婚する経緯を見れば（665）、ポッフインの墮落の芝居はベラに向けられたものだろう。つまり、ベラの矯正と教育を目的としたのがポッフインの芝居の意味なのだ。だから彼女が‘reform’されれば、ハーモンが危惧したように“the fate which seemed to have fallen upon my father's riches – the fate that they should lead to nothing but evil”（367）も忌避されるからだ。しかも、ハーモンが“*She may be a leetle spoil*”（772）と感じている不安感を少しでも緩和する必要があったのだ。となると、ポッフインが「演じた」守銭奴の姿は、そのまま拝金主義に染まったベラへのアンティ・テーゼと考えられる。それでは、ポッフインの矯正がベラをどのような方向へと矯正しようとしたのだろうか。

ベラが父ウイルファー氏に向って、自分が望むのは金銭目当ての結婚だと、何度も公言しているのは既に指摘した。しかし、失職したロークスミス（この時点では、まだハーモンとは判らない）と結婚したことで、ベラが目論みは外れるわけだが、とりたててベラがこれを後悔しているふしは見当らない。寧ろ、ベラは“*I want to be something so much worthier than the doll in the doll's house*”（679）と高らかに宣言しており、この件を読むかぎりベラが目指すのは世紀末風の“*New Woman*”を思わせる自立した女性である。し

かも、この“the doll in the doll's house”という言葉はノルウエーの劇作家イブセン (Henrik Ibsen) が覚えていたらしく、「人形の家」の靈感となったといわれている (Kettle, 170)。ところが、ベラの辿った人生は少なくともテキストに示されている限りは、ノラ (Nolla) の辿った女性解放のそれとは程遠いと言わねばならない。4部13章の“Mr. Boffin does the Honours of the Nursery Door”と題された挿絵では、生まれたばかりの子供を抱いたベラが心地よくまどろんでいる姿が示される (図②)。ポッフイン夫人に促されて“the nursery door”から部屋を覗いたポッフインの眼に移った光景は、以下の通りである。

**Mr. Boffin, submitting to be led on tiptoe to the nursery door, looked in with immense satisfaction, although there was nothing to see but Bella in a musing state of happiness, seated in a little low chair upon the hearth, with her child in her fair young arms, and her soft eyelashes shading her eyes from the fire.** (778)

ポッフインが“with immense satisfaction”を持ってこの光景を眺めているのは、自らの意思がここに成就したことを示している。この場面こそがベラの矯正と教育の完成なのである。これにより老ハーモンの遺志は達成された。但し、“a Ruth Pinch” (Dabney, 162) を思わせ、ウィルファー夫妻とともに家事をこなし、ヴィクトリア朝の典型的な主婦のように“The Complete British Family Style” (682) を調べるベラの姿に、老ハーモンが見込んだ“promising”なベラとは異なった姿を認めることは当然だろう。つまり、ベラを「矯正」するためには、まず彼女が無一文のロークスミスと結婚する必要があったのだ。そして、ロークスミスがハーモンと判明し、身元が証明された後、はじめて財産を継承してこそ、老ハーモンを墮落させた金の魔力から開放されるとディケンズは考えたのではないだろうか。それにより、息子に悲惨な結婚生活を強いようとした思惑は、ベラとハーモンに無条件で財産

を譲るという善意によって雲散霧消させられ、老ハーモンが意図した“mercenary marriage”に対し愛情の優位が主張されるという、ややお伽話的な結末が付けられたのである（David, 55-6）。<sup>11</sup>

#### Ⅷ：理想の召使と不実な召使

それではポッフインは何者だろうか。ポッフインはまず何よりも忠実な徒弟、召使なのである。それも、近代的な契約関係によって結ばれた主従関係ではなく、多分に前近代的な、温情によるものだろう。この温情、徒弟としての忠実さは、テキストに甚だ多く散見される主従関係と比較するとかなり際立っているように思われる。まず、ポッフインとロークスミスとの関係だが、ここではポッフインが主人の立場にあたるものの、ロークスミス（ハーモン）に円滑な財産移譲を意図しているので、寧ろポッフインの召使としての役割が強い。これは、老ハーモンとポッフインの関係をそのまま引き継いだものだろう。大切なのはウエッグの存在である。ウエッグは“his mercenary mind”（57）ゆえにポッフインの待遇に不満を持ちヴィーナスを使って主人の追い落とし画策するようになる。例えば次のようなくだりは“a piece of furniture”（299）のように扱われるウエッグの不満を代弁したものである。

If Wegg had been worse paid for his office, or better qualified to discharge it, he would have considered these visits complimentary and agreeable; but holding the position of a handsomely-remunerated humbug, he resented them. This was quite according to rule, for the incompetent servant, by whomsoever employed, is always against his employer. (296)

つまり、ウエッグはポッフインが忠実な徒弟、召使とするなら、主人に反発する“the incompetent servant”，怠惰で不実な徒弟、召使なのだ。この点、ポッフインが、共に正式な契約関係を交わしていないにも拘らず、ハーモン

(ロークスミス)のみを“*Our Mutual Friend*” (111) と呼び、ウエッグを無視したことは示唆に富むことではないだろうか。

ところで、忠実な徒弟ポッフインの最大の特徴は何といってもその人の良き善良さである。テキストでも“*an old fellow of rare simplicity*” (53) とか“*the man of high simplicity*” (185) とその率直さ、善良さが強調される。ペラがポッフインから家に来るように申し出を受けた時、ポッフインの“*the simplicity of his address*” (109) に思わず心を打たれたくらいである。実際、エドガー・ジョンソン (Edgar Johnson) によればディケンズは挿絵画家マーカス・ストーンにポッフインの“*oddity*” が“*an oddity of a very honest kind, that people will like*” (Johnson, 506) である事、つまり万人受けすることを条件に挙げている。

これに対置されるのがウエッグである事は指摘した。ウエッグは“*mercenary mind*” (57) 故に、ヴェーナスと組んで主人の追い落としを画策したことも (296) 指摘した。ところでウエッグの背信行為は、彼の利己心のみならず拝金主義のなせるわざでもある。しかし、そのように考えると、何もこれはウエッグのみの孤立して例ではない。ウエッグ的なものはテキストの至る所で目に付く。ヴェニアリング家 (the Veneerings) の晩餐に集う連中は、程度の差こそあれ、みな拝金主義にまみれた連中である。レディ・ティップィンズ (Lady Tippins), ポズナップ (Podsnap), 詐欺師ラムル夫妻, フレズビー (Fledgeby), デシマス卿 (Lord Decimus), ブリュワー (Brewer), ブーツ (Boots) 等がそれにあたる。彼らを取り結ぶのは全て虚飾であり、金による関係である。このような経済原理は *OMF* の人間関係のすみずみにまで浸透している。ポッフインが家族再構築の切札と考えていた孤児も、“*The suddenness of an orphan's rise in the market was not to be paralleled by the maddest records of the Stock Exchange.*” (195-6) と“*a marketable commodity*” (David, 90) の一部として扱われている。そうした関係が如何に希薄であるかは、ラムル夫妻の結婚式の有様や (127), 彼らの破産がヴェニアリン邸で噂されると、どうして破産者が上流社交界から出

るのだろうか話題になるくらい、お互いの事には無関心なのである(618)。また、ヴェニアリングも“a resounding smash”(815)故に破産して議席を失い、海外での生活を余儀なくされるが、かつての面々はそれすら気付いていないという。主人を裏切る不実な召使というウエッグの有り様は、このような文脈において見るべきだろう。仮に、ホーガース的な言い回しをヴィクトリア朝に当てはめて見るなら、ポッフインがその善行ゆえにフランシス・グッドチャイルド(Francis Goodchild)のような存在ならば、ウエッグはさしずめトム・アイドル(Tom Idle)だろう。そして、彼の背後にあるものが拝金主義、モラルの欠如、肥大化する利己心であり、それはヴィクトリア朝の精神風土を支えてきた「自助の精神」(“self-help”)の自堕落な有り様なのだ。

そして、「自助の精神」のみが特別視された結果、利己心が蔓延した風潮に對置されるのが、「互助の精神」、つまりこのテキストの表題で用いられる“mutual”ではないだろうか。表題については、そのものの解釈は余り“rewarding”ではないと指摘されながら(Kettle, 168)、様々な解釈が提示されてきた。この「相互性」(mutuality)が“real community”への希求を表しているとか、また“sets of friendship, true and false”を介して“community”の成立の難しさを示唆している等、指摘は様々である(Costell, xi. Lucas, 317)。共通しているのは、これらの指摘が具体的な人物名を指しているのではなく、つまり、具体的な“friend”ではなく、関係の有り様としての“mutual”の方にどちらかといえば重きが置かれている事である。語義的に“mutual friend”という言葉の不自然さを指摘する声もある。<sup>2)</sup>そう考えれば、表題が意図するところは、ダラス(E. S. Dallas)の言葉を借りれば“mutual friendship”(business)という抽象度の高い、具体的な個人に縛られない価値観を示唆したもの、という考えも許容されるだろう(Collins, 465)。とはいえ、一方ではこのような価値観を具体的に体現した人間、というより人間関係が介在する。断る迄もなくポッフイン(ポッフイン夫人も入れてもいいだろう)とハーモンという、良き主人と徒弟という関

係である。つまり、彼らの関係にこそ利己的な、金による関係、(Cash-nexus) とは無縁の「互助の精神」の在り方を見る事とも可能なのだ。それ故、この表題は二通りの解釈を許容する。一方では、「互助の精神」という博愛的な、どちらかといえば抽象度の高い価値観を示唆する反面、その具体的な人間関係のネットワークの在り方としてポッフインとハーモンの関係をも示唆しているのではないだろうか。

#### Ⅸ：ポッフイン、又は友愛のポリティックス

そうなる表題の意味はある程度、現実感を欠いたものにならざる得ないだろう。ポッフインは無論、ハーモンとの関係も同様である。これは一体、何を指すのだろうか。どうして、このような非現実的な特性を纏わざる得なかったについては、次のハンフリー・ハウス (Humphry House) の指摘が役に立つ。OMF でハウスの論文が利用されるのは、決まってゴミの山の正体について述べた箇所だが (House, 167)、次の箇所はディケンズの “Benevolence” について鋭利な判断を下した箇所である。カーライル (Thomas Carlyle) の “the idea of superman” の影響を認めつつ、ディケンズは別の方法を採用したと言う。

The only other course open to him was to take the commonest and simplest sorts of human kindness and show them intensified. His good people are precluded from thought because if they once started thinking they might begin to become tendentious; their scope of action is narrow and domestic, because if it were wider they might be in danger of becoming politicians. These negative qualifications make them rather colourless and commonplace; but the members of ancient ‘party of all good men’ may perhaps become effective if their goodness can appear as uniform, unshakeable, and pure. Being detached from the controversies and ambitions of the time, they must gain their moral influence by



the exaggeration of qualities which are not peculiar to the time.

(House, 51)

引用の箇所は、ディケンズのテキストに頻繁する人並はずれて善良な登場人物について述べた箇所である。ピクウィック (Mr. Pickwick) を筆頭に、ブラウンロウ (Mr. Brownlow), チアブル兄弟 (The Cheerble Brothers), ジャーンディス (Mr. Jarndyce) などが思い浮かぶが、こうした一連の隣人愛に富んだキャラクターの掉尾にポッフインを置いても構わないだろう。これらの人物は、困窮した者のために実に気前よく私財を投じ、それによって少しでも社会の不公平を是正しようとしているかのようである。このような希望が余りに脆弱なことは否めないが、ディケンズはそうした「互助の精神」, “mutuality” を阻む社会悪に気づき、その存在が大きき、個人を圧倒したものとされているほど、個人そのものは免罪されると考えたと思われる。ハウスが “benevolent” な人物には思考が欠落していること、つまり “tendentious” を避ける傾向があるという指摘は、こうした事情を指していると思われる。

とはいえポッフインの善良さがもつ意味はそればかりではないだろう。というのも、ポッフインにはディケンズがこれまで描いてきた数多くのキャラクターの面影を見ることも可能だからである。召使、忠実な徒弟という面では、サム・ウエラー (Sam Weller), マーク・タップレー (Mark Tapley) などであり、それこそ慈愛に満ちた、父親的な存在の影を見る事もできるだろう。これについては、ディケンズの実父ジョンの面影を指摘する批評家もある (Kaplan, 476)。しかも、この父親的な側面はハーモンとの関係で見ると際立っている。なぜなら、ポッフインがハーモンに為した慈善行為は、厳格な父親、老ハーモンを否定することだからである。厳格な父、老ハーモンと息子ジョンという親子のネットワークから、慈愛に満ちた（擬似的な）父ポッフインとハーモンのネットワークへの転換。ディケンズが “Our Mutual Friend” という表題で示したかったのは、このような関係（ネットワーク）

であり、それが「互助の精神」という友愛のポリティックスに基づいていることは言うまでもないだろう。



BIBLIOMANIA OF THE GOLDEN DUSTMAN

図 ①



MR. DOFFIN DOES THE HONOURS OF THE MURREY DOOR

図 ②

### 注

- 1) デイヴィッドはベラがお伽話的な次元へと引き上げられたと指摘し、“Bella's realistic and sustained acknowledgement of the economic character of the world in which she lives seems to be a necessary condition of her elevation to fairytale wealth”と述べている (David, 55)。ベラの実在は、少なくともエレン・ターナン (Ellen Ternan) なくしては考えられないようである。例えば、夫ロークスマスがハーモン事件の容疑者として出頭を命じられるときベラが叫んだ、“If I could not trust you, I should fall dead at your feet.” (759) という台詞は、ターナンの心情を反映させたと主張する批評家もいる (Dabney, 164)。また、エレ

ン・ターナンの面影をベラに認め、なおかつリジーとユージンの微妙な心理的距離感が、ディケンズとターナンのそれに当たるとの指摘もある(Kaplan, 475-6)。

- 2) 語法学者ファウラー(H. W. Fowler)によれば、そもそも“mutual”という語は、二者間の間のみで用いられるので、“common”の意味でディケンズが用いたとしたら、それは必ずしも正しくないと言う。更に、ディケンズのこの表題は、“the currency of *m. friend*”と大いに関係があるという。以下は、その説明文。

**mutual** is a well-known trap. The essence of its meaning is that it involves the relation, *x* is or does to *y* as *y* to *x*, & not the relation, *x* is or does to *z* as *y* to *z*; from which it follows that *our mutual friend Jones* (meaning Jones who is your friend as well as mine), & all similar phrases, are misuses of *m*. An example of the mistake, which is very common, is: *On the other hand, if we* [i. e., the Western Powers] *merely sat with our arms folded there would be a peaceful penetration of Russia by the country* [i. e., Germany] *which was the mutual enemy* [i. e., of both Russian & the Western Powers]. In such places *common* is the right word, & the use of *m*. betrays ignorances of its meaning. (H. W. Fowler, 368-9)

ファウラーは更に、この用法が、かなり“loosely”に用いられており、ディケンズもそうした影響を受けたものと記している。邦訳では『我が共通の友』(間訳)となっている。確かにディケンズの意図したと思われる事は、「共通」を意味する“common”に近いと思われるが、本論文ではボッフィンとハーモンの二人の関係に重点を置き、また、「自助」に対する「互助」の対比を際立たすために、あえて表題は『我が相互の友』とした。「共通」では、これらの関係、対比がぼやけてしまう印象を受けるからである。

#### 参考文献

Barnard, Robert. *Imagery and Theme in the Novels of Dickens*. New York:

- Humanities Press, 1974.
- Collins, Philip. Ed. *Dickens: The Critical Heritage*. London: Routledge and Keagen Paul, 1971.
- Costell, Michael. "Introduction" to *Our Mutual Friend*. Oxford: Oxford University Press, 1989.
- Dabney, Ross H. *Love and Property in the Novels of Dickens*. London: Chatto & Windus, 1967.
- David, Deirdre. *Fictions and Resolution in Three Victorian Novels*. London: Macmillan, 1981.
- Dickens, Charles. *Our Mutual Friend*. Oxford: Oxford University Press, 1981.
- Fowler, H. W. *A Dictionary of Modern English Usage*. Oxford: At the Clarendon Press, 1927.
- House, Humphry. *The Dickens World*. London: Oxford University Press, 1941 .
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. Harmondsworth: Penguin Books, 1979.
- Kaplan, Fred. *Dickens: A Biography*. London: Hodder & Stoughton, 1988.
- Kettle, Arnold. *Literature and Liberation: Selected Essays*. Manchester: Manchester University Press, 1988.
- Lucas, John. *The Melancholy Man: A study of Dickens's novels*. Sussex: The Harvester Press, 1980.
- Sadrin, Anny. *Parentage and Inheritance in the novels of Charles Dickens*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994.
- Schwarzbach, F. S. *Dickens and the City*. London: The Athlone Press, 1979.